

フィリピン系移民第二世代の日本社会への同化プロセス — なぜ排外主義にとりこまれていくのか —

河村 優花*

The Assimilation Process of a Second-Generation Filipino Immigrant into Japanese Society:
Why Does He Become Xenophobic?

Yuka Kawamura

I. はじめに

本研究の目的は、フィリピン系移民第二世代の、日本社会への同化プロセスを明らかにしつつ、その過程でなぜ排外主義が生み出されるのかを明らかにすることである。

ここで主な関心を向けている対象は以下の2点である。1点目は日本社会に対して、非常に同化志向の強い移民の「適応プロセス」である。強く「同化」を志向する移民たちは、異質性を打ち消す志向性を持つために、社会の中では見えにくい存在である。ゆえに、外部からそのプロセスを捉えることは難しい。「同化」という営みがどのように移民第二世代によって経験されるのか、この問いに対する答えはそのプロセスを経験している当事者の語りに耳をすませることでしか明らかにすることはできない。

2点目は、こうした問題関心によって行った調査の中で、インタビューが示した「排外主義的な態度」である。このような態度が表明されることは筆者にとって驚きであった。なぜなら、日本社会においては移民背景をもつマイノリティであり、小学校時代には排除を経験している彼は、「排除をする側」というよりはむしろ「排除される側」であり、さらに言えば「排除を告発する側」に立ってもいいはずだからである。しかし、インタビューでの彼の語りからは明らかに「排外主義的な態度」が立ちあらわれていたのである。

以上のような関心に立ち、本稿ではまず第2章で

移民の適応プロセスの先行研究を整理し、第3章以降はインタビューデータに基づき、同化プロセスを明らかにしたうえで、第4章では彼がいかに排外主義に取り込まれたのかを、最終章ではフィリピン系移民第二世代の日本への同化プロセスが排外主義とどのように関連しているのかを考察する。

II. 先行研究に見る適応プロセス—移民はどのようにホスト国へ適応するのか

(1) 移民のホスト国への適応プロセス

移民のホスト国への適応は、社会的及び心理的に多様であることが先行研究から明らかになっている。例えば、Portes and Rumbaut (2001=2014: 97-138) は移民第二世代のアメリカ社会への適応を「分節化された同化 (segmented assimilation)」と定義し、第一世代の「人的資本」、「編入様式」、「家族構造」が背景となって二世世代間の文化変容の型が分岐することを示している。また、心理学的な側面から移民の文化変容について論じている Berry (1997) も、「文化変容戦略 (acculturation strategies)」が「文化の維持 (cultural maintenance)」や他の文化集団への「接触と参加 (contact and participation)」によって異なる形態をとることを示している (Berry 1997: 9-12)。

上記のような移民における適応プロセスの多様性は、日本の移民第二世代にも当てはまる。在日フィリピン系移民第二世代を調査した額賀・三浦 (2021 181-208) は、かれらのエスニック・アイデンティ

* 日本女子大学大学院人間社会研究科教育学専攻博士課程前期1年生

ティが分岐していることを明らかにしている。この研究では、日本へ同化志向を持つ「ホスト国文化志向型」（さらに「メリトクラシー型」と「反学校文化型」に分岐）、フィリピンに明確な帰属意識を持つ「出身国文化志向型」、日本とフィリピン両方に帰属意識を持つ「ハイブリッド志向型」（さらに「ローカル型」と「グローバル型」に分岐）といったエスニック・アイデンティティの類型が明らかにされている。

では、上記のエスニック・アイデンティティの類型間には、どのような異同が見られるのだろうか。第一に、「メリトクラティックな価値観」（額賀 2021: 49）に対する志向性の違いが挙げられる。この中で「メリトクラティックな価値観」を内面化していない類型では、早期離学・不安定就労の傾向が見られる一方、この価値観を内面化している類型では、学業達成によるメインストリームへの接近が見られ、「メリトクラティックな価値観」と「経済適応」の形態には対応関係があると推察できる。

では、この対応関係は、なぜ生起するのだろうか。Bourdieu (1977=1993: 113-114) によると、新たな経済秩序に人々を従わせることができるのは、「経済的必然性の圧力」のみであるという。これを踏まえると、フィリピン系移民二世代における経済適応の条件としての「経済的必然性の圧力」は、「メリトクラティックな価値観」であると考えられる。なぜなら、日本においては、学歴と経済達成・地位達成が結び付いており、学業達成アスピレーションに対して「メリトクラティックな価値観」が、ポジティブに働くからである。よって、「メリトクラティックな価値観」の内面化の有無による「経済適応」の形態が、エスニック・アイデンティティの分岐に影響を与える社会的文脈であると考えられる。

第二に、額賀・三浦 (2021) はフィリピン系移民二世代におけるエスニック・アイデンティティの分岐要因として、ネットワーク形成の違いに注目している。それによると、「ハイブリッド志向型」を除いた全ての類型（「ホスト国文化志向型」・「出身国文化志向型」）において、日本ルーツもしくはフィリピンルーツへのネットワークの偏りが指摘できる。このような偏りの背景にあるものとして本稿が仮定するのが、「排除」である。佐藤 (2018) によると、排除は「同じ立場に立つことを要請する

メッセージを送る」行為である「同化」と『われわれ』と『われわれではない者』の差異』を作り出す行為である「他者化」から成り立つという（佐藤 2018: 64）。つまり、排除とは「ある者を『他者化』すると同時に別の者を『同化』し、他者と『われわれ』という関係を作り出す行為」であるという（佐藤 2018: 64）。こうした排除の構図の中で、一方のルーツの構成員から「同化」を要請されることで、他方のルーツを「他者化」する、あるいは一方のルーツの構成員から「他者化」されることで、「他者化」されたルーツとのつながりが切断されるといった営為が、フィリピン系移民第2世代を取り巻く文脈において生起している可能性があると考えられる。

以上から本稿では、次に示す2点を中心に、フィリピン系移民二世代の日本社会への適応プロセスを分析する。第一に、インタビューの「メリトクラティックな価値観」の形成プロセスと維持プロセスから、「経済適応」という文脈における移民二世代の日本社会への同化プロセスを検討する。第二に、佐藤 (2018: 64) に準拠し、「同化」と「他者化」という排除の文脈がインタビューにどのように経験されたのかという点を考察することで、同化プロセスが「排外主義」の形成にどのように結びついているのか検討したい。

（2）インタビューのプロフィールと調査方法

冒頭で述べたように、本研究は、フィリピン系移民二世代であるK氏に対して行ったインタビュー調査を中心に構成されている。K氏は、昭和40年に日本人父とフィリピン人母の間に5人きょうだいの長男として生まれる（なお、一時戸籍上きょうだいとなっていた異父妹を含むと6人きょうだいになる）。小学校5年間を日本の学校に通い、その間2回の転校を経験している。その後、小学校6年生及び中学校1～3年生の4年間は家族とともにフィリピンに渡り、日本人学校に通っている。一方、高校は日本の定時制高校に進学し、その後日本の私立大学へと進学している。大学卒業後は海外ODAで働いた後、日本に帰国して引越会社に就職するが辞職する。転職先には畳屋を選び、3回勤め先を変えつつインタビュー時点で4軒目の畳屋で仕事をしている。

インタビュー調査はK氏を対象に、1日あたり約2時間～4時間程度の聞き取りを3日間かけて(2022年10月22日、2022年10月23日、2022年10月29日)実施している。なお、記録は全て逐語として起こしてあり、以下のインタビューデータは全てこの逐語から引用している。こうした聞き取りの他に、K氏も交え、彼の父親と妹への補足的な聞き取り調査(2022年11月19日)も行っており、上記のインタビューのプロフィールの一部はこれを参照している。以上のインタビューは同意のもと実施し、発言の引用についても事前に同意を得た上で掲載している。

Ⅲ. フィリピン系移民第二世代における同化プロセスの様相

「やっぱ日本に、シンパシーを感じるね。うん。」(2022年10月29日聞き取り)と答えたのは、「自分のアイデンティティはどっちにあるとか、そういうの考えてることがあったら教えて。」という筆者の問いかけに対しである。ここから、K氏のエスニック・アイデンティティは「ホスト国文化志向型」(額賀・三浦 2021)であると判断できる。このことをふまえ、K氏の同化プロセスを、語りから描き出すことを試みたい。

(1) メリトクラティックな価値による同化

K氏の同化プロセスは「メリトクラティックな価値観」を強く内面化する中で形成されている。ここでは、「メリトクラティックな価値観」が「経済適応」という文脈において、いかに内面化され、維持されているのかを検討していく。

① 「メリトクラティックな価値観」の形成プロセス

K氏の「メリトクラティックな価値観」の形成は単線的に進行したとは言い難く、その原因は小学校時代の学習困難にあると考えられる。

[データ 3-1]

K: で、最初は、どんな小学生だったかっていうと、まず勉強はできなかつた。もう通知表の内容まで頭に浮かぶけど、いや取っついてあ

んだけどね。まだあるの。で、まあ例えば5段階で言えばほとんど1とか2の、まあ学習障がいみたいな。学習障がい、発達障がい。

筆者: そう思ったのは自分でそう思ったの?

K: え? 今思えばそうだった。なぜなら、ほとんど先生の言っていることがあんまりよく理解できてないし、まづうちの母親は、まあ外国人だけど、流暢に日本語が全て考えていることがしゃべれるような人ではないので、こう理論立ててしゃべるっちゃう(って言う)ことがあまりうまくない。だから、で、父親は仕事でそんなに子どもの側に長くいる場合ではないので、まあ基本家庭での教育は母親から受けるんだけど、母親は決して日本語が上手いわけではないし、で、例えば学校で出された宿題を、これ分かんないから教えてっちゃって(って言う)も、日本語が読めるわけでもないし、書けるわけでもない。(2022年10月22日聞き取り)

この語りからは、K氏の学習困難の原因の一つに、家庭教育を担当していたフィリピン人母の日本語能力の不足があったことがわかる。結果、学習に対する支援を家庭から得られず、「メリトクラティックな価値観」に基づいて、高い学業成績を残すことが極めて困難であったことがわかる。しかし、小学校5年生になった時、K氏は学習以外の局面で、「メリトクラティックな価値観」を内面化するきっかけをつかむこととなる。

[データ 3-2]

K: で、話し戻すけど、さっき劇的に変わったって言うのは、まあ前提としてはまあ足が速いってことで、運動会の時にクラス対抗のリレー大会っていうのがあるの。で、そこでは一クラスにまあ五人ないし六人選ぶんだけど、それを僕は推薦でアンカーを務めることになったの。そして、優勝したの、うちのクラスは。そうすると「お前すげえな。うん、大したもんだ。」っちゃって(って言う)。それからね、少しずつ自信がついてきて。あ、やればできるんだって。今まで、まあ「俺はもうだめだ」、「何をやってもだめなんだ」っていうのはよく口癖だったんだけど、ところが、頑張れば人に評価

されるんだと。で、思ったわけ。(2022年10月22日聞き取り)

上述からわかることは、K氏が「メリトクラティックな価値観」を内面化するにあたって、リレー大会での活躍が重要な契機となったことである。そして、この経験を通して「何をやってもだめなんだ」という自己認識が、「頑張れば人に評価される」という認識に転換されている。ここに、K氏が「メリトクラティックな価値観」を内面化したことが読み取れる。

その後、「メリトクラティックな価値観」の適用対象は、学習場面まで拡大されている。K氏は母のホームシックにより、小学校6年生から中学校3年生までの4年間をフィリピンで過ごすことになるが、その際にも、父の友人に日本からのお土産として参考書と問題集を買ってきてもらい、それを使って勉強していたと語られている。

[データ 3-3]

K：日本から、そうお土産にその参考書と問題集を買ってくれていう感じで。それで結構勉強してたんで。勉強も自分で独学で勉強するようになったね。(2022年10月22日聞き取り)

この時点までの過程で、K氏の「メリトクラティックな価値観」は相当程度に内面化されたことが分かる。

②「メリトクラティックな価値観」の維持プロセス

上述のプロセスで形成された「メリトクラティックな価値観」は、K氏のライフコースにおいていつでも前面に出ているものとして語られるわけではないが、それでも就業に関する語りにおいては、その存在が顕在化している。以下の語りは、海外ODAから帰国後に入社した引越会社での人間関係について語ったものである。

[データ 3-4]

筆者：会社の人との関係はどうだったの？なんか引越しの…

K：だから最初はすごくなんか期待して、大型

新人みたいな。なんか即戦力だと思ったけど、いざやってみたら、なんかもうなんか常識も分からねえし、言葉だって別にこう、ねえ、とりあえず日常会話は喋れるけど、だって専門用語とかあるわけじゃない。その単語すらよくわからないし。うん。たとえ(ば)、営業マナーだとか、そういうのを僕は学ばずに、いきなりそういうところに入ったから、その、一般常識とかそういうのをこうわからないままに行ったもんだから、もうけちょんけちょんにやられちゃって。でもって自信なくしちゃったんだよね。(2022年10月23日聞き取り)

ここからは、営業マナーの知識や語学力の不足によって、会社が期待する業績を出せなかったことが自信喪失の原因として語られている。このように、引越会社への就業についてのエピソードは、能力不足による挫折経験という語りを基調としている。しかし、そこには当人の能力では解決できない困難があったことが、引越会社から畳屋へ転職したきっかけについての語りから推察される。

[データ 3-5]

K：であと、もう一つはやっぱり、技術があれば、その会社でうまくいなくても、まあ転職しやすいっていうか、再就職しやすい。うん。だから同じ畳屋の会社だったら、どこでもできるわけで。(2022年10月29日聞き取り)

K氏は前述の引越会社での挫折を経て、畳屋に転職するという選択をするが、そのきっかけとして挙げるのは、技術があれば転職しやすいということである。それは、逆説的には「技術」があっても転職を余儀なくされる事態を想定しているということである。つまり、この語りにおいて、「メリトクラティックな価値観」に基づく実践の内容は、彼の置かれた状況を説明するうえでの強力な独立変数としての地位を失っているのである。これは[データ 3-2]のような「メリトクラティックな価値観」が深く浸透している語りからの大きな転換である。

なぜこのような価値観の変化が起こったのだろうか。原因として考えられるのは、引越会社での挫折が、「メリトクラティックな価値観」のみでは説明

できない要素を含んでいたということである。しかし、引越会社に関する語りでは、その点に関する言及は行われていない。一方、引越会社における挫折の語りとよく似た説明をしているのが、畳屋に転身後、2回目の転職先であった畳屋Cでの経験に関する語りである。

[データ 3-6]

K: で、C (畳屋の名前) は、自分自身はもう、二件畳屋をやっ、それなりにそこで得たスキル、畳のスキル言っ、もうそれこそ自分で、お金さえ資本さえあれば、自分で店開くことの実力があると思っただよね。ってところがそこで、結局、社長がワンマンで、すごい、まあ自分のやり方から外れることにはすごくなにかこう、結構言われちゃっ。でもう今までやってきたことをなんかこう、完全に否定するような感じになって。(2022年10月29日聞き取り)

上記の語りから分かることは、彼が自身の技術に自信をもって畳屋Cに就職したものの、社長との方針の相違によって、今までの経験を否定せざるを得なくなったことである。ここにおいて、彼の「スキル」が機能不全に陥ったのは、社長という、権力上上位にある者がK氏の「スキル」を否定したからである。すなわち、彼が畳屋としての経験を否定せざるを得なくなったのは、技術不足以前の問題として「力関係のアンバランスとその乱用」(森田2010: 71)が社長との間に成立していたからである。

しかし、K氏が会社での人間関係について語る時に準拠するのは、そのような社長との間の権力的な非対称性ではなく、「メリトクラティックな価値観」である。

[データ 3-7]

筆者: その、うまくいかなかったのは、あれ? やっぱり…

K: ま、あのね、だから、ま、ようは期待に応えられるような仕事をしてなかったんだよね。すごね、期待値が高かったんだよ。ところが、年齢的にも職歴にしても、自分の思った期待値よりも低かったちゅう(って言う)こと

で、で、まあ、彼からすれば、すごくまあプロフェッショナルちゅうか(って言うか)、かなり次元の…まあ、長時間労働とかさせてたけど、なんかこう、やってたけど、で今の時代にはちょっとそぐわないというか。うん。で、さらにこう、これ暴言とか、パワハラ、あのその暴力を使うとか、もうそれこそ俺が普通に弁護士に相談して訴えれば、絶対勝てるような、うん。この時代だったら。でもって自分も悔しかったんだよね、うん。いや、それに期待に応えられないっていう不甲斐なさと、あとこう、でだんだんこうだんだんおかしくなると、失敗が多くなる。うん。でもってどんだんどん悪循環になる。でそれで失敗でまた社長が、から攻撃された。でますますまた、頭、ちょっとおかしくなってくると。精神的にも。(2022年10月29日聞き取り)

上記では、社長(あるいは社員)との関係性がうまくいかなかったのは、K氏が「期待に応えられるような仕事をしてなかった」からだと説明し、自らの技術的欠点が会社からの排除の原因だと捉えている。また、社内での暴言、パワハラ、暴力という行為を訴えているにも関わらず、自分の悔しさについて語る際には「期待に応えられない」という点は挙げて、社内の権力関係の非対称性に対する悔しさには触れないのである。ここには「メリトクラティックな価値観」に対する強い傾倒が見て取れる。次節では、その背景要因の一つと考えられる、彼を取り巻く「排除」の文脈について分析する。

(2) 排除の文脈における同化

続いて、排除の文脈でK氏の語りを分析してみたい。ここで対象となるのは、K氏における日本の小学校での強い排除の経験とフィリピンに渡った際の経験である。

① 「メリトクラティックな価値観」の背後にある排除のプロセス

日本の小学校におけるK氏は、学習困難だけでなく、人間関係についても困難を抱えていた。当時のK氏は、吃音のために流暢にしゃべることができず、周囲の子どもから「何かこう変わってる子っ

ていうか、劣ってるんじゃないか」と認識されており、「仲間外れになったり、まあそういういじめに近い」状態であったことが明かされている（2022年10月22日聞き取り）。このような状態は「他者化」として定義できるが、こうした状態を作り出していたのは子どもたち同士の関係性だけではない。

[データ 3-8]

K：で、不思議なことに、あ、で一年生のときとか二年生のときは、先生からの体罰がひどかった。で、今の時代では考えられないけども、例えば、忘れ物をすると、グラフに忘れた人の名前と、それ何回忘れたっていうこうグラフをつけられるの。忘れるたびにこう棒グラフのように伸びていくの。つまり、忘れた人は、公にさらしてこいつはこんなに忘れ物したっていうことを大きな紙に貼られて、でもってここにラインがあってこのボーダーラインを超えると（笑）忘れ物の王様っていう称号を与えられるの。つまり、もう先生がさ、クラスを巻き込んでいじめに遭っているような状態。（2022年10月22日聞き取り）

この語りは、教師が「忘れ物」を理由として、K氏を「他者化」するふるまいをしていたことがわかる（なお、上記データでは1・2年次に教師からの体罰を受けたとあるが、続くインタビューの中では2・3年次の経験であったと語られている）。そして、このような教師による「他者化」の要因は、以下のように自らの「障がい」によるものであるとK氏には、認識されているのである。

[データ 3-9]

筆者：え、忘れ物をしたから…

K：ああ。まあ多分ね、あ、俺の怒られるのは忘れ物のね。でもさ、そういう障がい者っている。（2022年10月22日聞き取り）

上記から、K氏において「他者化」の原因は、周囲ではなく、自らの欠陥（＝「障がい」）に求められていることが分かる。また、ここでの欠陥は、「忘れ物をしてしまう」という能力上の問題としてとらえられている。さらに、このような「他者化」

の原因を、自らの能力に求める認識は、周囲から強いられたものであったと見なされている。

[データ 3-10]

筆者：その人格を否定してたのっていうのはやっぱり勉強ができなかったり、忘れ物が多くて先生に言われたりするから？

K：あのね、僕は自分が悪いから先生が叱ってくれるんだ（って）友達に言われるの。だから、俺が悪いから、俺がだめだから、先生も困ってしかってるっていうかさ。うん。だから、先生が悪いとか友達が悪いとかじゃなくて、自分が悪いからこうなってるんだっていうこう認識だよ。（2022年10月22日聞き取り）

このような周囲からの圧力は、彼にとって「他者化」の原因が自分にあるとせざるをえず、これが「メリトクラティックな価値観」の内面化の素地となった可能性が指摘できるだろう。また、リレー大会での活躍という局面を経て、「他者化」を回避するための戦略として「メリトクラティックな価値観」が強化されたことが推測できる。

②新たに生成される「人工的な境界線」

他方で、K氏のフィリピンにおける家族生活は、複数世帯のフィリピン人親族との同居に特徴づけられており、その中で彼独自の基準によって「フィリピン」と「日本」の間に人為的な境界線を引いている様子がうかがえる。例えば、彼はその親戚たちについて、以下のように非難する。

[データ 3-11]

K：これが、まあ、ね、例えばそんな理不尽で、ただ遊びでお金を使ったとして、「なくなっちゃった、困っちゃった、保険も何もありません」と。うん。で、「仕事行ってもつまんないから行きませんでした」、で「お金が足りませんでした」、「何とかしてください」ちっても（って言っても）、「しょうがないわね」ちって（って言って）お金を出す。まあ日本人だったらね、「甘えるな」っていう話なんですよ。

（中略）

ただ、フィリピンの場合は、確かにそうなんだけど、「でも今困ってんの」って、「これで死んじゃう、このままだと死んじゃう」ちったら(って言ったら)、フィリピン人の人が、「ここでやったらもうそれこそ神様が見てるし、こんなことをね、それをほっといたら地獄に墮ちる」みたいなさ。ね。うん。「天国に行けないよ」みたいな。これで、「ほっといたらあんたもう天国に行けないから」みたいな感じになったら、やっぱり救ってやらなきゃいけないんだよね。で、それにつけこむんだよ。そういう風に、なることを分かっているから、それにつけこんで甘えてくるんだよね。それがね、ずると思う。(2022年10月22日聞き取り)

ここでは、例えその危機が自分の責任であっても、「家族主義」や「キリスト教」に基づくエートスを利用して、助けを求めてくるフィリピン人親族に対して、「ずると思う」という反感が表明されている。この語りの興味深い点は、非難の矛先はフィリピン人「親族」という固有のものに向いているはずだが、いつの間にかそれは「フィリピン人」というより大きなカテゴリーとして認識されていることである。そして、それに対置される形で「甘えない日本人」というカテゴリーも提示されている。ここにおいて、K氏は「日本人」と「フィリピン人」の間に、「甘え」という観点から「境界線」をひく。このような「人工的な境界線は、だれかほかのものを排除することによってしか維持できない、本来的にネガティブなもの」(岸 2013: 408)であり、フィリピン人親族を「他者化」することによって生成されている「境界線」であるといえる。

このような実践が行われた背景には、K氏の家族構造が関係していると考えられる。というのも、K氏の日本人父は一時上記に示したようなフィリピン人親族の同居を認めているが、その後引っ越しという形でその関係を断っているからである。このような日本人父によるフィリピン人親族との関係の切断が、K氏に内面化された結果、上記のような語りが生成された可能性が指摘できる。さらに、フィリピン滞在中にK氏はフィリピン人母と日本人父の別居を経験している。このようなライフイベントも上記の境界を生成する条件の一つとなったことと推察

できる。

(3) 同化プロセスの全容

第三章を通して、K氏の日本社会への「同化プロセス」を概観してきた。彼の同化プロセスは、「メリトクラティックな価値観」の内面化と「排除」の文脈が複雑に絡み合いながら進行したと結論づけることができる。この点について、絡み合った関係性を整理し、「メリトクラティックな価値観」による「経済適応」と「排除」の文脈が、K氏の同化プロセスにどのように絡まっているかを検討する。

第一に、「メリトクラティックな価値観」に基づく同化志向は、「排除」に巻き込まれる中で形成されていたことが指摘できる。つまり、教師や他の子ども達から「他者化」され、自らにその原因を求めると、「メリトクラティックな価値観」の素地を形成しているのである。また、リレー大会での活躍によってこの価値観が強く内面化されていることから、「メリトクラティック」であることは、彼が周囲から承認を得るための戦略であったと考えられる。それは一方で、周囲から「他者化」されないための戦略として「メリトクラティックな価値観」を内面化したという側面もあると推察できる。このように、「メリトクラティックな価値観」に基づく同化志向は、「排除」の経験の中で強化されたものであったことがうかがえる。

第二に、「メリトクラティックな価値観」を強く内面化することが、K氏に「排除」を不可視化させかつ正当化する装置として機能していたことが指摘できる。このもとで、K氏は2つの性向を身に付けている。1つは、「私事化」(森田 2010: 146-9)の性向である。これは、森田(2010: 148)を参照すると、公的な領域より、私的な領域に大きな比重を置くようになる性向と定義することができる。ゆえに、「他者化」が行われても、その原因は、私的な「責任」として負われ、公的な領域の「排除」は「私事化」の性向を持った主体(すなわちK氏)にとって「不可視化」されることになるのである。

2つ目は、社会関係を平等なものとして捉える性向である。「メリトクラティックな価値観」は、各人の社会的地位の配分が、公平な条件のもとで競争した結果によって決定されるということを前提にした価値観である。よって、この価値観に基づいて自

身の経験を理解する限り、不平等な関係というものは存在しないことが前提となる。結果、「排除」に巻き込まれたとしても、そこで生み出された「非対称的な社会関係」（岸 2013: 406）は、公平で平等な競争の結果として生まれた関係として正当化される。

このように、K氏の同化プロセスは、「メリトクラティックな価値観」と「排除」の文脈の両者の共犯関係のもとで成立していると考えられる。

IV. 越境経験と排外主義の形成

では、K氏の「排外主義的な態度」はどのように形成されたのだろうか。この点を検討していく。

日本の排外主義運動を分析している樋口（2014）は、排外主義運動へのマイクロ動員過程が2つの段階から成り立っていることを明らかにしている。すなわち、第一に「政治的社会的過程で排外主義運動と親和的なイデオロギーを形成し、潜在的な支持層となっていく」段階があり、第二に「排外主義運動のフレームと接点を持って共鳴し、参加への動機を持つようになる」段階が存在しているのである（樋口 2014: 116）。以下では、排外主義がK氏においてどのように形成されたのかを明らかにする。そのため、樋口（2014）の示した前述の2つの段階のうち、第一の段階に焦点をあてて分析を進める。

(1) 「韓国」に不信感を抱いたきっかけ

K氏が韓国に対する不信感を抱いたきっかけは日韓ワールドカップだったという。当時、K氏はインターネットの情報を自分で集めるようになっていたが、そこで韓国人による他の出場国へのなじりやマナー違反といった情報を目にする。これをきっかけに、「韓国っていうのは、なんか皆が思ってるのちょっと（と）違うんじゃないか」（2022年10月22日聞き取り）と感じるようになったK氏は、自分でインターネットを使って韓国の歴史を調べようになり、結果として韓国に対する否定的な態度を形成していく。

[データ 4-1]

K：だからもう、その時に自分は身近な韓国人

はいなかったんだけど、もしいたら、友達とか知り合いがいたらまた違ってたかもしれないけど、でも大体韓国の朝鮮日報とか、中央日報とか、そういったそのまま翻訳したのを読むと、それほら、韓国人の記者が書いて、書いてあるから、日本が編集してるわけじゃない。そのまま訳したやつを読むと、それ読むだけでも、何て身勝手なことを言ってるんだと。自分の都合のいいこと言って、やって、被害者面してるっていうかね。プレイ・ザ・リディクティム（victimと思われる）っていうんだけど。被害者面っていうかね。ヴィクティムっていうのが被害者。（2022年10月22日）

このように、K氏は「身勝手なことを言ってる」、「被害者面」といった言葉で「韓国」を非難するのである。では、こうした韓国への不信感はどのように形成されたと考えられるのだろうか。

(2) 越境経験によって生み出される同化戦略一階層化されたルーツ

K氏を排外主義へと導いたイデオロギーの形成過程には、「フィリピン」に対する認識が深く関与している。以下はK氏が自らの政治的イデオロギーについて語っている箇所である。

[データ 4-2]

K：だ（から）、そういう保守的な考え方とか、ね、韓国が嫌いだとか、そういうのは韓国が嫌いなのもやっぱりフィリピンを見てると、うん、そういう批判精神からあんだけど。自分勝手に都合のいいことばかり言って、ね、やることもやらないで約束も守らないし、ね、そういうのが気に食わないっていうだけであって、だ（から）基本は多分、そのフィリピンを俯瞰、日本を見ると。海外から日本を見る視点ができたんで。（2022年10月22日）

このように、K氏は自身の保守的な政治的志向性や「韓国嫌い」を、フィリピンと結び付けて捉えている。一方、K氏が前述の発言をした後に、筆者が「韓国嫌い」とフィリピンでの経験の関連性について尋ねたところ、彼はその関連性を否定している。

つまり、彼の中で「韓国嫌い」と「フィリピン」は意識的に直接結びついているわけではないのである。

その媒介となるのが、「日本」である。上記の語りで、K氏は「韓国」、「フィリピン」、「日本」の3か国に言及し、「フィリピン」と「日本」を比較するようになったことが、「韓国が嫌いだ」という感情に結び付いていることを示している。彼が「フィリピン」と深く接触し、なおかつ海外から「日本」を見る視点を身につけたのは、小学生から中学生時代にかけてのフィリピンへの越境経験である。では、彼はフィリピンへの越境を通して「フィリピン」と「日本」をどのように対比しながら、両者への認識を形成していったのだろうか。

第一に挙げられるのは、経済的な豊かさという観点からの対比である。

[データ 4-3]

K: でもって、まあ子どもながらも、こうすればもっと発展するのにとか、ここに歩道橋があったらここで交通事故の減るのにとか。まあ日本をこう比べながら、ああ日本は恵まれてるなど。多分ね、日本に長く住んでると、「いや海外はどうだ」ってよく批判するけど、「海外はいいって、日本はこころへんが遅れてる」とかよくいうけど、フィリピンにこう四年間住んでる僕からすれば、そういう発展途上国というところの国から日本を見れば、どんだけあんたらもう恵まれてるか分からない。(2022年10月22日聞き取り)

上記の語りから読み取れることは、K氏が「フィリピン」と比べた時の「日本」の豊かさを実感しているということである。また、逆に言えば、日本と比べた時の「フィリピン」の貧しさを実感した体験でもあったといえる。つまり、日本の豊かさによってフィリピンの貧しさを知り、フィリピンの貧しさによって日本の豊かさを知るという関係が成り立っているのである。よって、「フィリピン」と「日本」は、「貧富の関係」として相互依存的に認識されるようになったことが指摘できる。

第二に、K氏は越境経験を通して、「日本」を「解放者」に、「フィリピン」を「植民地」に位置づ

けるという独自の歴史認識を形成している。

[データ 4-4]

K: でもってなおかつ第二次世界大戦時には、植民地にされたそれぞれインド…あのフィリピンだったら、まあスペインとかアメリカとかに植民地にされてたし、あのまあインドネシアとか、タイとかベトナムとかベトナムなんかはフランスとか、あの…パラオ、パラオ島はドイツだったかな、うん。まあ植民地にされてたんだけど、日本が解放してくれたわけよ。あるいはその反政府軍ちゅうのかな（って言うのかな）、うん。反対…そういう人たちを教練とか軍事教練して、で一緒に戦って、で開放してるから。だから、まあ韓国とかそういうのを除いて、やっぱ台湾もそうだよな。だから、日本人、でもって勤勉で真面目で優しい、人に優しいし。うん。でもって、その自分たちの文化も、大切にしてくれると。うん。でもって自分たちのそのなんだろう、やっちゃいけないところも気を使って、でもって言葉を奪ったりしないし、そこで必要なインフラ整備とかもしてくれたと。だから、それが、あのフィリピンに住んでると、そういうことが、日本人は、ねえ、ここではなんかもう日本政府はどの、海外ではこうなる、日本は遅れてるみたいなことわかれてるけど、実はまんざらでもないうまいって国なんですよ。(2022年10月23日聞き取り)

上記の語りから、K氏の認識において、「日本」が西欧諸国に植民地化されていた国々を植民地状態から救った「解放者」として捉えられているということがわかる。対するフィリピンは、「日本」に解放してもらった「植民地」というポジションに位置づけられている。つまり、K氏の歴史認識のうえでは、「フィリピンと日本」は、「植民地と解放者」という形で捉えられているのである。

第三に、道徳的判断において、「日本」を基準にする一方、「フィリピン」をその対象に位置づける認識が形成されている。第三章では、K氏が道徳的な側面から「人工的な境界線」(岸 2013: 408)を、フィリピン人と日本人のエートスとの間にひいてい

ることを明らかにした。この「境界線」に関する語りを道徳的判断という側面から分析すると、彼は「甘えない」日本人のエートスに準拠しており、そのうえで「甘えてくる」フィリピン人のエートスを批判していた。よって、道徳的基準において、K氏は日本人のエートスを準拠すべきものとして中心に位置づける一方、フィリピン人のエートスをそれに照らして、その正しさを判断される対象として位置づけている。よって、道徳的判断における「フィリピン」と「日本」のエートスの関係は「対象」と「基準」という関係に集約できる。

以上、「経済」、「歴史」、「道徳」という3観点から、K氏の「フィリピン」と「日本」の捉え方を分析してきた。これらを概観した時、最終的にうかびあがるのは、第一に彼の越境経験が「日本」と「フィリピン」に対する前述の3観点の認識を形成する基盤となっていることである。例えば、「経済」に関しては、「日本」と「フィリピン」の経済的な豊かさが対比されることによって、双方の経済状況に対する認識が結びつけられている。また、歴史認識に関しても、「フィリピンと日本」は「植民地と解放者」という形で結びつけられており、その認識に越境経験が関与していることが語られている。さらに、「道徳」に関しては、フィリピンでの親族関係を通して、「日本人」のエートスに準拠して「フィリピン人」のエートスを評価するという形で両者の結びつけが行われている。

第二に注目すべきことは、上述したような「フィリピン」と「日本」の結びつきが非対称性に基づいていることである。すなわち、「経済」でいえば豊かさという側面で、「歴史」で言えば歴史的権力という側面で、「道徳」でいえば道徳的判断に与える影響力という側面で、「フィリピン-日本」間の非対称性が読み取れるのである。さらに、ここにおいて、常に日本がフィリピンに対してより上位の位置に、反対にフィリピンは日本に対してより下位の位置に位置づけられていることが分かる。よって、越境経験がK氏に形成したのは、「日本」と「フィリピン」における上下の階層化だったと言える。これは同時に、「日本」と「フィリピン」の双方にルーツがあるフィリピン系移民第二世代のK氏にとって、「ルーツの階層化」として経験されたと推察することができる。

加えて、前章で分析したK氏における「日本」への強い同化志向を前提にして考えると、こうした「ルーツの階層化」は日本社会への同化の一部を形成していると考えられる。すなわち、階層化によって自身のルーツを「日本」と「フィリピン」に分断したうえで、より上位に位置づく「日本」への同化が志向されるのである。その意味で、K氏にの越境経験は、自らのルーツとしての「フィリピン」について深く理解するというよりは、むしろ「フィリピン」と対比される「日本」への帰属意識を強化した経験であったと考えることができる。そして、この経験によって形成された「ルーツの階層化」という認識は、「フィリピン」と「日本」の関係に「非対称な差異を作り出す」（佐藤 2018: 64）ことで、「フィリピン」という「他者」の輪郭を明らかにすると同時に、「日本」という「同化」対象を明確化する「同化戦略」として機能することになったのである。

(3) 「日本」と「韓国」の対等性に対する反発

前述の「ルーツの階層化」は、K氏のルーツとは無関係な「韓国」にも形を変えて波及していく。

[データ 4-5]

K: でもって、よく韓国を見てたりするのは、あまりにも韓国が日本を、卑下したり、なんかこう名誉を、なんだろうな、侮辱したり、うん。で、海外に、なんか慰安婦の像とかこう世界中に建てたり、ね、旭日旗を批判して、やったり。そういうのを見ると、なんか日本を、ちょっと侮辱しすぎっちゃうか（って言うか）、それでちょっと怒ってんだよね、俺。だって韓国に対し、経済発展の手助けして、でもって北朝鮮が今にも中国とか北朝鮮が、攻められて、助けてくれるのは、日本にある米軍基地だったり。ね。あって、それが怖いから、もうやっぱり韓国には手出せないようになってんだから。安全保障とか、あと経済問題で、日本に助けられてるのはいっぱいあるんだよね。そう、それを恩着せがましく言うつもりはないけども、ちょっとなんかほんとひどいなって思ってるから。うん。やっぱり自分はやっぱり日本人として誇りを持ちたいし、それをけがされるのは

やっぱ許せないって気持ちがあんだよね。
(2022年10月29日)

以上の語りから、K氏において「韓国」と「日本」の関係が安全保障と経済面における「被支援者－支援者」という関係として階層化されていることが読み取れる。これは、「日本」と「フィリピン」の間で成立させていた同化戦略が、「韓国」にも拡大された結果生じていると考えられる。つまり、「日本」を上位に、「韓国」を下位に位置づけ、「日本」に同化しようとする戦略が採られているのである。

しかし、「韓国」は海外に慰安婦の像を建てたり、旭日旗を批判したりといった形で「日本」との対等性を主張しており、K氏の設定した序列に基づく振る舞いをしていない。これでは、「同化対象」としての「日本」と「他者」としての「韓国」を明確化し、上下の階層化という形で「非対称な差異を作り出す」(佐藤 2018: 64)ことができず、K氏の「同化戦略」は、その根幹がゆらがされるのである。

結果として、K氏は自分の想定する日韓の序列を無視し、同化戦略をゆるがす「韓国」のふるまいに対して憤りを感じることになり、それが排外主義への水路を形成しているのである。

(4) 越境経験はどのように排外主義を形成したのか

フィリピンへの越境経験は、K氏において「日本」と「フィリピン」間の階層化とそれに基づく「日本」への新たな同化戦略をつくりだすものであった。K氏はフィリピンでの生活を通して、「日本」と「フィリピン」を結び付ける認識を獲得する。その認識は、「日本」を上位に、対する「フィリピン」を下位に位置づけるものであった。こうした「ルーツの階層化」は、K氏において新たな同化戦略として形成されることとなる。すなわち、階層化された2つのルーツのうち、より上位に位置づく「日本」に対する「同化」が志向される一方、それに対して下位に位置づいている「フィリピン」は「日本」に対する「同化」を補完するために「他者」として位置づけられるのである。

上記のような同化戦略は、「韓国」と「日本」の関係に対しても応用されることとなる。つまり、

「韓国」を「日本」に対して下位に位置づけ、「韓国」と「日本」の間に上下の階層関係をつくりだすことが、K氏の「日本」への同化に必要とされている。しかし、「韓国」が「日本」への対等性を主張する時、この階層化は危機にさらされる。ゆえに、K氏は「日本」への対等性を主張する「韓国」に対して強い反感を抱くのである。

加えて、「韓国」に対する排外主義そのものがK氏にとっての重要な同化プロセスの一部をなしている可能性も見逃せない。つまり、「韓国」の主張する「日本」への対等性を否定することが、日韓間に「非対称な差異を作り出す」、「他者化」(佐藤 2018: 64)のプロセスの一部であり、「階層化」による同化戦略を再生産しているとも見られるのである。よって、K氏の「韓国」に対する排外主義は、同化戦略である「階層化」を維持する目的によって生じされると同時に、排外主義そのものによって「階層化」が再生産され、同化プロセスが形成されていくという、同化プロセスの2つの側面から成り立っていると捉えることができる。

V. 同化プロセスと排外主義の形成

最終章では、なぜ同化プロセスの中で排外主義が形成されるのかという問いを検討する。同化プロセスの形態は、第一に「同化」の動機づけの中身によって、第二に「同化」に用いられる「資源」の内容によって決定づけられると考えられる。

第一の、K氏の「同化」への動機づけに関与しているのは、小学校時代の「排除」の経験であると考えられる。第3章で論じたように、彼は他の子どもたちや教師からの「他者化」を経験し、その後「メリトクラティック」な実践によって承認された体験を通して、「同化」している。ここから、「排除」に巻き込まれる中で、「他者化」を回避するとともに、確固たる集団内でのメンバーシップを獲得することが、K氏の「同化」への動機づけになったと考えられる。佐藤(2018: 93)は「なんらかのメンバーシップを確保したいという動機を持つ人(特にそのメンバーシップが危うくなっているという危機感を持っている場合など)は、より積極的に『同化』メッセージに反応するだろう」と述べている。この点からも、小学校時代の「排除」の経験がK氏を

「同化志向」へと向かわせたことが推察できる。

第二の「同化するための資源」について、小学校時代のK氏が最も比重を置いていたのは「業績」である。この資源を中心に「同化」を組織していた小学校時代は、K氏の「同化対象」は学級集団に収斂していた。しかし、フィリピンへの越境経験を機に、K氏は「ルーツ」を新たな「同化」の資源として加えている。結果、「同化」の対象はより大きく、より抽象化された「日本」というルーツになっていく。この資源は、「フィリピン」を「日本」の下位に位置づけ、「他者」という領域をつくりだすことによって、「日本」という「同化対象」を明確化する、といった形でK氏に運用されていると考えられる。このことを本稿では「ルーツの階層化」として述べた。

そして、この「ルーツの階層化」は、「フィリピン-日本」間への適用にとどまらず、「韓国」という第三国にも拡張されることとなる。「韓国-日本」間の上下に階層化された関係を想定することによってK氏は、下位に位置づけた「韓国」を「他者化」とするとともに、上位に位置づく「日本」に「同化」しているのである。そして、この「同化」と「他者化」の関係をおびやかすとK氏に認められた、「日本」への対等性を求める「韓国」の動向は強い反発の対象となり、結果として排外主義が形成されたと考えられる。さらに、排外主義そのものも、「韓国」と「日本」の対等性を否定し、「階層化」を維持・強化することで同化戦略の一端を担っていると推察できる。

以上から、K氏が同化プロセスの中で排外主義に取り込まれていく原因は、2点挙げられる。1点目は、「排除」の経験である。この経験は、K氏に「他者化」を回避するとともに、マジョリティ集団としてのメンバーシップを確保することを強く動機づけていると考えられる。「他者化」の回避とメンバーシップの確保のためには、誰が「他者」で、誰が「メンバーシップの対象」なのかを明確にする必要があり、その過程で両者の間には境界線がひかれる。しかし、「人工的な境界線は、だれかほかのものを排除することによってしか維持できない、本来的にネガティブなもの」（岸 2013: 408）であるため、K氏の同化プロセスには「排除」がついてまわることになる。

2点目は、上述の「排除」を行うにあたって「ルーツ」が資源として活用されたことである。フィリピンへの越境経験によって「ルーツの階層化」が生じたことを契機に、K氏は「日本」を「メンバーシップの対象」とするとともに、「他者」としての「フィリピン」や「韓国」を構築するようになる。これが表面化したものが、「韓国」に対する「排外主義」であると考えられる。

以上、本論文で明らかにした知見から、最後に問題提起を行いたい。K氏の排外主義の根源をたどった先にあったのは、「排除」の経験であった。ここからは、「排除」の被害者であったK氏が「排除」を乗り越えるために、「排外主義」の加害者になっていくという構図が見えてくる。このことが示唆するのは、「排除」や「排外主義」は表面的に起こるのではなく、経験を媒介として社会構造に位置づけられることに生起し、拡大していくということである。「排除」のない多様性に開かれた社会を目指すために、われわれは「排除」がどのように経験され、それがいかなる社会構造と接続しているのか、改めて問うていく必要があるだろう。

【文献】

- Berry, John J. W., 1997, "Immigration, Acculturation, and Adaptation," *Applied Psychology: An International Review*, 46 (1): 5-34, (2023年10月30日取得, https://www.cultureresearch.org/sites/default/files/berry_1997.pdf).
- Bourdieu, Pierre, 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*, Paris: Les Editions De Minuit. (原山哲訳, 1993, 『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾』藤原書店.)
- 樋口直人, 2014, 『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.
- 岸政彦, 2013, 『同化と他者化—戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版.
- 森田洋司, 2010, 『いじめとは何か—教室の問題, 社会の問題』中央公論新社.
- 額賀美紗子, 2021, 「イントロダクション—多様化する移民二世代のエスニック・アイデンティティ」清水陸美・児島明・角替弘規・額

賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』, 明石書店, 43-68.

額賀美紗子・三浦綾希子, 2021, 「二国の狭間で揺れ動く—フィリピン系のエスニック・アイデンティティ」清水陸美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』, 明石書店, 181-208.

Portes, Alejandro and Rubén. Rumbaut G, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press. (村井忠政・房岡光子・大石文郎・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾訳・山田博史訳, 2014, 『現代アメリカ移民第二世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)

佐藤裕, 2018, 『新版 差別論—偏見理論批判』明石書店.

